

多 面 体 の 結 晶

シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』試論

小 嶋 信 之

序

シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の悲劇『アントニーとクレオパトラ』(*Antony and Cleopatra*) ほど、人によって評価や解釈の異なる作品も少ない。或る人びとはこれをシェイクスピアの最高傑作と讃嘆する¹⁾かと思えば、他の人びとは、四大悲劇(『ハムレット』、『オセロー』、『リア王』、『マクベス』)にはとうてい及ばない不純な恋愛悲劇だという²⁾。またクレオパトラはアントニーの死後直ちに自殺を決意したのであり、それを延ばしたのは、シーザーから生け捕りにされまいがために、あたかも生き延びることを欲しているかのように思わせるためのお芝居をしているのだ、と言う³⁾かと思えば、いや、そうではない、できれば生き長らえたかったのだが、ローマ凱旋の時の見世物にしようというシーザーの隠された意図を知った時、はじめて死を決意したのだ、と言う⁴⁾。また、これは悲劇でさえない、いわゆる問題劇 (problem plays, 即ち、『尺には尺を』、『終りよければすべてよし』) のような、一応喜劇とはされているが、それにしては余りにも暗い、「暗い喜劇」のように、悲劇か喜劇か分らない、問題劇であるという人⁵⁾ もいる。

確かに、『ロミオとジュリエット』のような、始めから終りまで一貫して緊迫した、純粋な恋愛悲劇とは言われないであろう。主題は多岐に分れ、どこに焦点をあるのか掴み難い。シェイクスピアが素材としたプルタークの英雄伝(その英訳の Sir Thomas North による *Parallel Lives*, 1579) では、クレオパトラは淫蕩な悪女であり、アントニーはその色香に溺れて、そのためにシーザーとの戦に敗れて没落する愚かな放蕩者とされている。プルタークは嚴格

なモラリストであり、この両主人公を徹底的に弾劾している。では、シェイクスピアの態度はどうであったか。

シェイクスピアはプルタークの史実に忠実に従っている。しかし、そのモラルにまでは従っていない。アントニーとクレオパトラの恋愛は、その最後に至って最高潮に達する。二人とも死後の再結合を固く信じながら死んでいく。それは美しい。この世のものならず美しい。私はそこにこの劇の真髄を見る。そして、そこから更めてこの劇全体が見直されるのだと思う。先に、主題は多岐に分れている、と言った。それは、いわば多面体のようなものである。しかも、全体として見れば、一つの結晶を成している。それで私はこの劇を「多面体の結晶」と呼びたい。

『アントニーとクレオパトラ』は、1606年から1607年にかけて書かれた。女王エリザベス一世は1603年に亡くなり、時代は既にジェームズ一世の、いわゆる Jacobean Age に移っている。イギリスのルネサンスはイタリアから伝わるのが遅く、しかも美術や建築よりも演劇に花開いた。シェイクスピアも愛国心溢れる英国史劇や、数々の、いわゆる happy comedies (楽しい喜劇) の名作を書いた。しかし、1600年から1601年にかけて書かれた『ハムレット』以後、前述の問題劇を経て、1604—5年の『オセロー』、1605—6年の『リア王』、同年の『マクベス』と、深刻な暗い悲劇に移行し、その直後に『アントニーとクレオパトラ』が書かれた。この頃は既にルネサンスも後期であり、その初期の楽天的な人間讃美は反転して悲観的な人間の暗黒面の強調となっていく。エリザベス時代の初め頃はなお明るかった時代精神も、Jacobean Age となった頃には暗さを増している。それは、中世からの安定した神中心の世界観がコペルニクス(1473—1534)の地動説によって根底から揺ぶられ始め、ルッター(1483—1546)やカルヴィン(1509—64)等の宗教改革が相次ぎ、他方、それを異端として宗教裁判にかけ残酷に処刑するカトリックの反宗教改革運動などの波が荒れ狂う激変の時代である。イギリスでは既にヘンリィ八世(1491—1547)が第一王妃キャザリン・アラゴン(Catherine Aragon)との離婚問題から、それを認めないローマ教皇に反抗し、1534年に宗教改革を断行して Anglican

Church（日本では「聖公会」と呼んでいる）を樹立した頃である。このような時代の激変は思想や芸術の上にも大きな影響を与えないではおかなかった。『アントニーとクレオパトラ』には、その背後にルネサンス後期の思想が色濃く滲み出ている、といえよう。それで、先ず、「時代精神の背景」について考えてみたい。

『アントニーとクレオパトラ』に顕著にみられる特徴は、劇全体としてみても、登場人物個人としてみても、相反するものの対立がある、ということである。そこに時代精神の反映が顕著に現われている。

次に、この劇には、運命や運命の女神に関する言及が非常に多い。戦争に負けたのも運命のせいにされる。いわゆる運命悲劇的な要素が多分にある。しかし、アントニーも、クレオパトラも、最後には決然と運命に挑戦して死んでいくのであるから、厳密には運命悲劇とは言われまい。だが、劇中には、運命に関する言葉が異状なほど多い。寡聞にして、この点について詳しく論じた文章に接したことはないが、一考を要する一つの主題なのではあるまいか。

また、政治劇としての比重も大きい。舞台はローマからエジプトにわたっており、また夥しい諸国にも関っている。三頭政治は崩れていき、先ずレピダスがシーザーから失脚させられる。シーザーには天下統一への野望があり、アントニーに勝ってついに彼は待望の独裁者となる。ローマ共和国はシーザーを皇帝に戴く帝国に変わろうとしている。

よく、シェイクスピアは、ローマ人やギリシャ人を書いたのではなく、人間そのものを書いたのであって、彼の同時代人と変らない、と言われる⁶⁾。しかし、最近の研究によると、案外シェイクスピアは古代ローマについて良く知っていたそうである⁷⁾。

シェイクスピアはプルタークのように道徳的に両主人公を糾断しているのではないが、確かに道徳劇の面もある。それは、冒頭のパイローのアントニー批判をみても分る。シーザーは、面と向って非難されてはいないけれども、道徳的に見て如何かと思われる節が多分にある。姉オクティヴィアをアントニーに与えるのも、アントニーが必ずクレオパトラの許へ戻るということを予想し

て、その時には アントニーを討つ口実が出来るからだと計算しての上のことだという人もいる⁸⁾。

恋愛悲劇の主題は、この劇の最も問題になるところであるが、私は前にも述べたように、ここに重点を置いて、ウィルソン・ナイトのように、「神聖な」(divine) 恋愛である、と見たい。多面体の「面」は、英語では aspect というより、facet、結晶は crystal というより jewel 或いは gem と言った方がいい。つまり、日本語では「宝石」である。だが、そこにはアントニーの自殺のし損いというような、不様な、滑稽な面もある。Janet Adelman によれば、この劇の構造 (structure) は喜劇的である。それだけに、この中に嵌め込まれた本質的に悲劇的な体験のために、われわれはこの劇をどのように見なしているか分らない。この意味において、この劇は人生そのもののように不実で、痛ましい (treacherous and painful) ものであると言っている⁹⁾。

例えば1幕2場は喜劇である。女たちの、占い師 (soothsayer) を取り巻いての、猥褻な言葉を交えた賑やかな場面である。だが、侍女チャーミアンの手相を見て、占い師が言う「あなたはお仕えするかたより長生きされます」ということは、クレオパトラの自殺の後、たとい僅か2、3分くらいとはいえ、チャーミアンが生き延びるという未来を予言しており、不吉な意味を秘めている。

また、2幕7場のマイシーナム沖のポンペーのガリー船上の大酒盛りの場面も喜劇であるが、ミーナスがポンペーに向って次のように言う時、そこには不気味な人生の裏側が覗いている。

These three world-sharers, these competitors,
Are in thy vessel: let me cut the cable;
And, when we are put off, fall their throats;
All then is thine.

(2. 7. 70-7310)

(全世界を三分し、共有するものが、あなたの船にいま乗りこんでいる、
私が 錨 綱 を切りましょう、
いかりづな)

沖に出たところで、あの三人の喉に襲いかかるのです。

それですべてはあなたのものだ。¹¹⁾

ポンペーを全世界の主にしてやろうというミーナスの提言は、名誉を重んずるポンペーの拒否によって事なきを得たが、そのようなどす黒い陰謀が、酔っぱらってはしゃいでいる酒盛りの裏に潜んでいる、とは誰も知らない。喜劇と悲劇とは紙一重の差である。

アントニーが自殺し損ねて、「ええい、まだ死ねぬか、まだ！」と叫ぶ時、観客は思わず失笑するであろう。軍神マルスの化身の最後としては余りにも惨めである。しかし、人生にはこのようなことも起こり得るであろう。

福田恒存氏はその訳の「解題」において次のように言っておられる。

「ウィルソンが指摘した序奏部におけるアントニーの愛の讃歌も、さらにその導入部としてファイローの嘲笑を用意したうでなければ歌われない。……アントニーの讃歌の背後には、不安と逃避とがある。彼の守護神はシーザーを恐れているのだ。この作品の主題はそこにある。アントニーの寛大は英雄の美德ではない。……そればかりではない、この作品では、美、偉大、純粋が祀りあげられると、その前後のどこかでそれを引きずり降すように、醜、卑小、不純の嘲笑の音が響くのである。」¹²⁾

あれこれ考え合わせる時、私にはオールダス・ハックスレイの「悲劇と全体的真理」¹³⁾ というエッセイが思い浮ぶ。

ハックスレイによれば、悲劇とは、現実の人生からその一面を抽出した、化学的に純粋なものであり、それ故に強烈に観客の心を打ち、カタルシス¹⁴⁾を引き起こさせる。これに反して全体的真理の文学は、現実から何ものを差し引かず、ありのままの人生を表現する。そのような文学は古代には非常に稀なものであるとし、その例として、ホメロスの『オデュッセイア』の第十二巻を挙げている。それによると、オデュッセウスが仲間の者たちと船でメシナ海峡（シリアとイタリア本土の間）を渡っていた時、仲間のうちでも最も勇敢で、最もすぐれた六人が怪物スキラ¹⁵⁾にむさぼり食われてしまった。やがて、危険が

過ぎてから、オデュッセウス達は夜をすやすやのために船を岸辺に近づけ、シシリアの浜辺で夕食の準備をした。「手際よく」（ハックスレイの英訳では、‘aptly’）準備した、とホメロスは言う。『オデュッセウス』第十二巻は、つぎの言葉で終わっている。「かれらは渴きをみだし飢えをみたすと、親しかった仲間のことを思って泣いた。涙を流すうちに眠りが静かにかれらをおそった。」

ハックスレイは言う。「これは真理である。全体的真理である。真理以外の何物でもない。古代の文学作品のなかで、この真理を語っているものは、何と少ないことか！ 真理の断片なら、たしかにある。すべてのすぐれた作品が、真理の断片を与えてくれる。さもなくば、すぐれた作品とは言えまい。しかし、全体的真理となると、見つからない。過去の偉大な作家たちの中でも、この真理を与えてくれる者は、信じがたいほど少ししかない。ホメロスは、『オデュッセイア』におけるホメロスはその少数者の一人である。」次に芸術の真理について述べ、続けて、「偉大な詩人であっても、ほかの作家であつたら、スキラが通りすがりの船をおそう物語を、どんなふうに結んだことであろうか、考えてみたまえ。六人の男は、よろしいか、仲間の眼の前でとらえられ、むさぼり食われたのであつた。『オデュッセイア』以外の詩であつたら、生き残つた者たちはどうしたことであろうか？ ホメロスが泣かせたように、泣いたであろうことは言うまでもない。しかし、果して泣く前に、夕食を準備したであろうか？ それも、手際よくである。泣く前に、腹いっぱいになるほど飲んだり食ったりしたであろうか？ そして、泣いたあとで、いや泣きながらそのまま、静かに眠りに落ちたであろうか？ おそらくは、そうはしなかったろう。そして、その章はその涙によって、悲劇の幕を閉じたことであろう。

しかし、ホメロスは全体的真理を語るほうをえらんだ。いかにむごい仕方で友を失つた者も食べなければならないということを、飢えは悲しみよりも強く、飢えを満たすことは涙に優先するということを、ホメロスは知っていた。友が食い殺された直後であろうと、玄人は玄人の腕を見せることをやめない、たとえその腕が夕食をつくるといったことにすぎぬにしても、玄人は腕をふるうことに満足を見出すことをやめないということを、ホメロスは知っていた。腹が

一杯になった時（腹が一杯になってこそ初めて）ひとはなげき悲しむことができるということを、後の悲しみは快樂にちかいということ、ホメロスは知っていた。さらにまた、飢えが悲しみに優先するのと同じように、つきにおそいかかる疲労は悲しみを途中で終らせ、友の死を忘れさせてくれるだけに—そう快い眠りのうちに、悲しみを溺れさせてしまうということ、ホメロスは知っていた。要するにホメロスは、この主題を悲劇的に扱うことを拒否して、全体的真理を語るほうをえらんだのだ。」

ハックスレイが挙げているもう一人の稀な全体的真理の作家は フィールドイング (*Henry Fielding*, 1707-54) である。そのトム・ジョーンズ (*Tom Jones*, 1749) において、作者は、その最も魅力的な、殆んど完璧に近い若い女性、ソフィア・ウェスターソンが馬から抱きおろされたとき、宿屋の主人の上に、頭から先に仰けざまにひっくり返えらせた。その瞬間に見るものをあつと言わせるような魅力があらわれた。宿屋の戸口にいた田舎者たちは、あるいはやっと笑い、あるいは腹をかかえて笑った。助けおこされたソフィアは、かわいそうに、乙女心を傷つけられ、困惑のあまり顔を真赤にしていた。この出来事に、本質的にありうべからざることは一つもない。いや、むしろ、ここに文学における真実のすべてがある。しかしそれはいかに真実ではあっても、悲劇のヒロインには決して起こりえぬ出来事である。しかし、フィールドイングは悲劇の掟に従うことを拒否した。彼は何もののをも避けなかった。ロマンスのさなかにだろうが、場ちがいな笑うべきことが突発するのを恐れなかった。かれは悲劇作者になろうとはしなかった。悲劇の作者は、筋立てや登場人物を、化学的なまでに純粋に保とうとする。まちがいなく、束の間ソフィアの魅力的なお尻が真珠のように輝いただけで、『トム・ジョーンズ』という作品から悲劇の女神を追い出すに充分であった。

ハックスレイは言う。「I・A・リチャーズ氏は『文芸批評の原理』(*I. A. Richards, Principles of Literary Criticism*) の中で、すぐれた悲劇はどんな場ちがいなアイロニーにも堪える、と言っている。すぐれた悲劇はすべてをその中に吸収して、しかも悲劇であることを止めないというのだ。リチャーズ

氏は、悲劇の出来の良し悪しを知る試金石として、この非悲劇的なものから反悲劇的なものまでを吸収する包括力をつかっているかに見える。だからこそギリシャの悲劇もフランスの悲劇もすべて、そしてエリザベス朝の悲劇もほとんど、欠点だらけということになる。わずかにシェイクスピアの傑作だけがこの試金石に堪えることになる。少なくともリチャーズ氏はそう言うのだ。果して、そうであろうか？ 私はかねがね疑問に思ってきた。シェイクスピアの悲劇を貫いて、アイロニーが、そして痛烈なシニシズムが流れていることは事実である。しかし、そのシニシズムは、英雄的な理想主義を裏返しにしたものであることが多い、そのアイロニーは、英雄のロマンスの写真の陰画のようなものである。トロイラスを黒にし、その黒のすべてを白にしてみたまえ。そうすれば、サーサイティーズになる。オセローにデズディモウナをさかさまにすればイアゴウになる。白いオフィーリアの陰画は、ハムレットのアイロニーであり、オフィーリア自身の歌う狂乱の歌のあからさまな猥雑な文句である。…たしかにある物の影は、ある物の写真の陰画は、その物と無関係ではない。シェイクスピアのアイロニーやシニシズムは、かれの世界を深めるのに役立つのである。しかし、それを上げるのには役立っていない。ホメロスの描く場ちがいな出来事が『オデュッセイア』の宇宙を上げたように、シェイクスピアの悲劇の世界がそのアイロニーやシニシズムによって上げられたなら、そうなればそれは、自動的に存在することをやめてしまっていたろう。たとえばひとり残されたマクダフ（妻子をマクベスに殺された）が夕飯を食べ、ウィスキーを飲みながら、殺された妻子のことを考えて憂鬱のとりこになり、やがてその睫毛を濡らしたまま、眠りに落ちるとするでしょう。そのような場面は、人生の事実には忠実なものとなろう。しかし、悲劇には忠実でないことになる。そのような場面が持ちこまれることは、その悲劇全体の性質が変えられることになる。『オデュッセイア』流に扱われた『マクベス』は、悲劇であることをやめる……。

悲劇をつくるためには、芸術家は人間体験の全体の中から唯一つの要素だけを取りだして、それだけを劇の材料として使わねばならない。悲劇とは全体的

真理から分離されたものである。いわば、生命ある花からエキスを蒸溜するように、全体的真理から蒸溜されたものである。悲劇は化学的に純粋なものである。だからこそ悲劇は、急劇にわれわれの感情に働きかける力をもつのだ。…悲劇がそのカタルシスの機能を効果的に果すのは、その化学的な純粋性による。……

悲劇を読んだり観たりした後に起こる心の高まりは、一時的な酩酊のようなものである、と私は考える。われわれの生活は、悲劇によって与えられる型の中に永くとどまっていることはできない。磁石を取りのぞいてみたまえ。鉄の粉はもとの混沌に戻ろうとするであろう。いっぽう、全体的真理を語る文学作品が与えてくれる、おとなしく受けいれるほうの型は、その意匠においては、悲劇のように思いがけぬ美しさをもつわけにはいかぬであろうが（おそらくは、それだからこそ）もっと安定性をもつのである。悲劇のカタルシスは、はげしい默示的なものである。いっぽう、全体的真理を語る文学作品のカタルシスは、もっと穏かであるが、永続的である。」

次いでハックスレイは現代作家に言及して、「注目すべき現代作家の中に、全体的真理を語ろうとしない者は一人もない。」といい、「プルースト、D. H. ロレンス、アンドレ・ジード、カフカ、ヘミングウェイ、この五人は、明らかに注目すべき重要な現代作家である。かれらは、当然のことながら、互いにひじょうに違っている。そして、五人とも純粋な悲劇を一つも書いておらず、全体的真理に関心をもっているという点で、この点でのみ共通している。」と語っている（これが1931年に書かれたことは注目に値する）。そして、結論として、「悲劇は、これを死滅させるには、あまりに価値のあるものである。結局のところ、化学的に不純な文学と純粋な文学と、全体的真理を語る文学と部分的真理を語る文学と、二つの種類の文学が、それぞれの領域において、同時に存在していけない理由はない。人間精神は両者を必要としているのである」と結んでいる。

私は『アントニーとクレオパトラ』こそ、ハックスレイのいわゆる「全体的真理」を描いていると同時に、悲劇でもある、という、シェイクスピア自身の

作品のうちでも殆んど唯一の最高傑作であるばかりでなく、世界文学史上でも極めて稀な傑作であると思う。

次に『アントニーとクレオパトラ』を、宝石のように燦然と輝く美しい作品にしている大きな要素として、その詩の美しさを挙げないわけにはいかない。シェイクスピアの劇は、大部分無韻詩 (blank verse)¹⁶⁾ から成り立っている。特にこの劇には修辞学という hyperbole (日本語で「誇張法」と訳されるが適当ではない) が数多く出てくるがその壮嚴な美しさは無類である。この詩の音楽的効果を日本語に移すことは不可能であるが、この主題についてもできるだけ考えてみたい。

以上の各問題を、それぞれ章に分けて論じていこうと思う。

この拙論を草するに当って、資料の蒐集その他について、第一経済大学経済研究会の研究助成費に多大の恩恵を蒙ったことを厚く御礼申し上げます。また、非常な御好意を寄せられた小津次郎氏に対して深い謝意を捧げます。更に、数々の示唆に富む助言を賜り、且つ、貴重な書籍を多数貸与して下さった本学の哲学の助教授波多江忠彦氏に深謝するものであります。

注

学生諸君のため、なるべく詳しく注を附けることにした。

- 1) Coleridge, G. Wilson Knight, Janet Adelman 等。
- 2) A. C. Bradley, 福田恒存等。
- 3) John Dover Wilson, Derick R. C. Marsh 等。
- 4) A. C. Bradley.
- 5) Ernest Schanzer.
- 6) Paul A. Cantor, *Shakespeare's Rome—Republic and Empire* (Cornell University Press, 1976) p. 7.
- 7) Ibid., p. 10.
- 8) Derick R. C. Marsh.
- 9) Janet Adelman, *The Common Liar, An Essay on Antony and Cleopatra* (Yale University Press, 1975), p. 52.
- 10) テキストは John Dover Wilson の *The New Shakespeare* 版を用いた。幕、場、行もこれによる。
- 11) 訳は小田島雄志氏のを借用した。名訳である。できるだけ原作の行に忠実に従っているのも良い。但し、欲を言えば、欄外に幕、場を附けてほしかった。
- 12) 福田恒存訳『アントニーとクレオパトラ』(朝潮文庫, 9刷, 昭和52年), 195-196頁。

- 13) Aldous Huxley, *Tragedy and the Whole Truth in Music at Night and Other Essays* (London, Chatto & Windus, 1931).
- 14) Catharsis. ギリシャ語 Kátharsis. 医学では下剤による便通（浄化）の意味であるが、哲学・美学では、悲劇の主観的効果として人の心に鬱積している恐怖と同情とを解放することによって一種の快感を起こさせる過程で、アリストテレスの「詩学」に基く。
- 15) Scylla. Messina 海峡にある岩の前方に有名な渦巻 Charybdis があり、船がその難を逃れようとして岩に近づくとそこに住む犬のような6頭の女怪物のえじきになったという。
- 16) 末尾に韻を踏んでいない。一行が弱強5歩格から成る。これを iambic pentametre という。なお、原文の言葉の音楽を、ゼビカセット・テープでお聞きになることをお勧めする。わたしが聞いているのは、Caedmor 版であるが、誠に素晴らしい。これは福岡でも入手できる。

第一章 時代精神の背景

1

シェイクスピアは何よりも先ず劇作家であり、詩人であって、いわゆる哲学者でもなければ、思想家でもない。彼の思想が生の形で語られることは絶えて無く、すべて、ある特定の情況に置かれた劇中の登場人物のせりふだけである。ソネット（14行詩）の中にシェイクスピアの主観の語られているものがある、と主張する人もあるけれども、これも、どこまでがシェイクスピア自身の言葉であるかどうかは疑問である。

しかし、時代精神は、不可避的にその作品に反映している。場合によっては、かかる時代精神の知識なしには、彼の作品の適確な解釈ができないということも起こる。それで、どうしても時代精神の背景を考慮する必要があるわけである。

さて、『アントニーとクレオパトラ』が書かれた時期は、ちょうドルネサンスの後期に当たっている。これは中世から近代への出口であり、一種混沌とした様々な思想が渦巻く過渡期である。もはや焦点は一つに集中せず、古代と中世との調和のとれたシンメトリカルな世界像は破れ、人びとは帰趨に迷い、あるものは逆に安定した中世を指向し、あるものは公然と無神論を唱え、偶像破壊

的な革新思想を強調する。E・M・W・ティリヤードの「エリザベス時代の世界像」¹⁾は、一時もてはやされたけれども、それは今や中世の遺物の主張でしかなかった。神—天使—人間—動物—植物—鉱物の、「存在の大いなる連鎖」(The Great Chain of Being, これはアメリカの Lovejoy の説であって、邦訳がある。Tillyard はこの説を採用している)はルネサンス後期にはもはや通用しなくなっていた。その世界像は、ギリシャのプトレオマイオスの天文学とキリスト教の神学との総合にある調和と諧調に充ちた、秩序整然たる一大体系であった。地球は不動で、宇宙の中心にあり、その周囲を透明な球体 (sphere) が円を描いて回転する。球体には太陽・月・星等の天体が固着して、幾重にも重って回転し、その球体同志の摩擦によって、美しい天体の音楽が奏でられる。九天の高みには神が鎮座し、世界は秩序正しい階層 (hierarchy) をなしている。国家も個人もその大宇宙 (macrocosm) の小宇宙 (microcosm) である。大宇宙の頂点に神が存在するように、国家には君主が、個人には理性が君臨する。君主に対して民衆が反逆するときにその国家が無秩序の渾沌に陥入るように、個人の場合にも肉体が理性に反逆すると、同様の混乱が生ずるというのであった。シェイクスピアの悲劇『トロイラスとクレシダ』(1601—2)の中で、ギリシャの將軍ユーリシーズが、有名な等級論 (degree speech) をするが、既にギリシャ軍は、統率しようもなく腐敗し、混乱している。

16世紀から17世紀へかけてのルネサンスの大きな特徴は「対立」である。矛盾、逆説、二分、アムビバレンス (相反する感情の同時存在) 等があらゆるものに認められる。これを否定しようとして、例えば、ニコラス・オヴ・クーザ²⁾は、*coincidentia oppositorum* (対立の一致) という説を唱えた。即ち、無限に較べれば総ての数が等しくなるように、すべてのこの世の対立は神の無限の統一のうちに和解せしめられる、というのである。また、ピコ・デラ・ミランダ³⁾は、自分を *Princeps Concordiae* (統一の第一人者) と呼び、対立の統一者になろうと努力した。彼は更に、世界の偉大な宗教や哲学の教義は、神と善い生活とに対するすべての相矛盾する思想にも拘らず、それらは多かれ少なかれ同一物に帰する、と主張した。——これらの説は、逆に彼等の否定しよう

とする思想の緊急性を証明するものである。16世紀初頭、コルネリウス・アグリッパ⁴⁾は、人間の知識における大きな対立矛盾を指摘し、調和の古典的象徴である天体の音楽を嘲笑した。カスティリオーネ⁵⁾及びパラケルスス⁶⁾は、対立は経験の支配的な原理である、と主張する。彼等は更に、対立の相互作用は、積極的な、健康な現象であるとさえ説いた。このような著名な偶像破壊者達が16世紀から17世紀を通じて、「闘争」の考えを宣言した。1644年にミルトンが、善と悪の知識は、「味われた一箇の林檎の薄皮から」(out of the rind of one apple tasted) 生ずる、ということ、また人間の運命は「悪によって善を」(good by evil) 知ることであり、一般に「われわれは対立するものによって学ぶ」(we learn by what is contrary) と言った時、彼は、ルネサンスの思想の最も潑刺たる、また最も強力な動機について述べたのであった⁷⁾。

経験は対立する力の相互作用から得られるというような考え方は、新プラトン主義⁸⁾ばかりでなく、アリストテレス⁹⁾ やスコラ学¹⁰⁾ 派とも相反するものである。アリストテレスにとって、対立とは、思考と感覚との周辺であり、あらゆるものの限界を規定する両極であり、このようにして、質と程度との区別の規準を据えるものである。これらの区別が、物質界にあらうと、精神界にあらうと、分析の方法は同一である。暑と寒、放蕩と吝嗇とは、哲学者が現象を研究するための正確な位置付けとなる。対立は存在の計量の規準としてだけ存在する。このようにして、あらゆる二つの対立が明白にお互を否定することが本質的なことなのである。新プラトン主義者は、対立を、真理に溶け込んで、それらの相違を吸収し、否定するものである、というのに対して、アリストテレス主義者は、対立を方法論上の道具と見なし、その価値は区別立てをすることだけにある、と説く。

だが、ブルーノ¹¹⁾は、アリストテレスの対立に対する考え方を論駁するとき、遠くギリシャの古典に遡ってプラトン¹²⁾とヘラクリトス¹³⁾を論拠とする。二人とも、対立の相互作用は、ダイナミックな、動的な過程であると教えた。また、対立は、まことにお互を発生させ、そして、それらの複雑で象徴的な関係は、経験の基本的な動因の一つなのである。ヘラクリトスは闘争は存在の

最も主要な原理である、と主張する。プラトンは彼の著作を対立（即ち、弁証法）¹⁴⁾の上に築き、そしてアルキビアデス（Alcibiades）に、その有名な言葉の中で、ソクラテス¹⁵⁾を「対立の人」と述べさせた。ブルーノは、これらの古典の権威者達を引用して、対立が、形而上学、認識論、及び心理学の主要な作用であることを力説したのであった。

ブルーノのような対立の極端な説は、16世紀の後半の思想の流れのうちに生み出されたものである。彼は反宗教改革運動の犠牲となってローマ教皇の命により、焼き殺された。その頃はあらゆる種類の対立、二重性、反対などで鳴り響いていたのである。

2

かくして『アントニーとクレオパトラ』の中には、多くの対立がある。先ず全体としてみると、ローマとエジプトとの対立がある。これは人びとによって色々に呼ばれる。例えば、ローマが政治、エジプトは恋愛、とか、ローマが政治的権力を代表するとすれば、エジプトはあり余る生命力の行使であり、また、ローマは節度、エジプトは過剰¹⁶⁾であるというふうに言われる。

また、個人の内部にも、相対立し、自己分裂する諸力が見られる。主人公アントニー自身の内部にも、ローマとエジプトの対立があり、過去と現在の、そして愛と憎との対立がある。女主人公クレオパトラの内部には、生と死、名誉と生、愛と嫉妬との対立が見られる。この両主人公については、後で詳しく述べたい。

更に、主な登場人物の内部にも対立がある。理性の人エノバーバスは、アクチアムの海戦でアントニーが敗れた時、主君を見棄てて、シーザーの許へ走る。その時彼が何も持って行かなかったことを聞いたアントニーは、家来に命じてエノバーバスの許へ彼の持物を送り届けさせ、「元気で暮せ、もう二度と主人を変えずにすむよう祈る」という手紙をつけてやる。それを届けた兵士は、「お前の大将はさすがに今もなおジュピターだな」と感嘆する。

アントニーの深い寛大な精神に、さすがのエノバーバスも非常に感動して自責の念に駆り立てられる。そして、このような偉大な前の主人を敵とする気になれず、ついに、理性と感情の板挟みうちに悶死してしまう。

アントニーとシーザーとの仲がうまくいかないのを心配して、アグリッパが、シーザーの姉で未亡人のオクティヴィアと、これも妻ファルヴィアを亡くしたアントニーとの結婚を提議する。シーザーとアントニーが義兄弟になれば、世界も平和になるだろう、というわけである。シーザーもアントニーも同意して結婚が成立する。しかし程なく領土問題その他で二人の間が陰悪になる。アセンズの邸で、シーザーのことを責めるアントニーの言葉を聞くオクティヴィアは非常に嘆いて次のように言う。

O my good lord

Believe not all, or if you must believe
Stomach not all. A more unhappy lady,
If this division chance, ne'er stood between,
Praying for both parts:
The good gods will mock me presently,
When I shall pray, 'O, bless my lord and husband!'
Undo that prayer, by crying out as loud,
'O, bless my brother! 'Husband win, win brother,
Prays, and destroys the prayer——no midway
'Twixt these extremes at all.

(3. 4. 10-20)

(お願いします、
そんなことはお信じにならないで。お信じになってもお怒りにならないで。
私ほどふしあわせな女はいない、
これがもとで仲たがいにねば、二人のあいだに立ち、
二人のために祈らねばならないのですから。

神々もきっと私をばかにして笑われるでしょう、
 「夫をお守りください」とお祈りしたその口で、
 その祈りをうち消すように、「弟をお守りください」
 と言うのをお聞きになれば。夫の勝利を、弟の勝利をと、
 祈ってはその祈りをうちこわす、その両極のあいだに
 中道はないのです。)

3

認識される現象の中の対立、形式的な逆説¹⁷⁾、理論的な矛盾、心理的な曖昧さ、そして、道徳上のディレンマは、種々様々の分析の鋭い二元的な方法である。まことに、経験を対立の中に溶け込ませようとする試みは、非常に広く行き渡っていたので、それはこの時代の主要な知性の様式の一つであると見られるであろう。それはルネサンスの流行であった。ロザリイ・コリイ (Rosalie Colie) が示したように、逆説は、ただ単に非常に人気のある表現法の流行病であったばかりでなく、また、思想と経験への特徴ある態度でもあった。ペトラルカ¹⁸⁾の多くの追随者達は、エロティックな感性を、苦痛と快楽、或は肉体と精神とが何れかの優位を争っている相対立する諸要素の間の、和らげることのできない緊張として描いた。カルヴィン¹⁹⁾は、人間性そのものを「対立の競争」と呼んだ。そして、サー・フィリップ・シドニ²⁰⁾は、ペトラルカとカルヴィンの弟子であって、これらの対立を「高貴な英知」(erected wit)と「伝染病に冒された意志」(infected will)との対立と名付けた。人生は対立する諸々の力と結果との交換可能の過程であり、変化である、という常識は、ヘラクライトス、プラトン、ストア学派²¹⁾、ピュタゴラス学派²²⁾、そしてルヘメス・トリスメギストス²³⁾によって打ち立てられた。アタラクシア²⁴⁾への上昇は、対立の理解に基づいているという懐疑的な学説は、大きなエネルギーを以て復活された。皮肉(アイロニイ)即ち、肯定と否定を同時に主張する声は人気のある文学上の戦略となり、アグリッパ、エラスムス²⁵⁾、及びサー・トマス・モーア²⁶⁾

等によって擁護された。モンテーニュ²⁷⁾とベーコン²⁸⁾は読者の先入見を打破し、彼等に積極的な探究を行わせるために、注意深く、相矛盾する議論を用いた。彼等の過激な対立の強調により、これらの学説と技巧は、すべて地上的な事物へ接近する手段と見なされた。この地上即ち人生とは不協和音の鳴り響く現象であり、以上の方法は、この現象と接触する道であって、人びとを抽象的な観念の遊戯から、現実との直接の接触へと解放させてくれるものである。シェイクスピアは全く同じ効果をあげるために対立を用いている。この点において、彼は孤立した無学の天才なのではなく、むしろ同時代の知的関心への積極的で、見識のある参加者なのであった。

ルネサンスの過激な対立の潜在力は、カスティリオーネ、パラケルスス、及びブルーノの著作において、他に見られないほど明白に現われている。カスティリオーネは、彼の有名な「廷臣論」(*Il Libro del Cortegiano*)において、論争的に、倫理と教養の発展の領域における対立の支配を主張する。対立はまたパラケルススの科学の基本的要素である。ブルーノは、パラケルススに学び、カスティリオーネと同じ典拠から理論を導き出し、経験一般の形式原理として、対立を強調する。カスティリオーネ、パラケルスス、ブルーノの理論は、シェイクスピアにおける対立の研究に極めて適切である。それは彼の数多くの劇(特に、『アントニーとクレオパトラ』)、や詩の構造がわれわれに彼等の思想を想起させるからばかりでなく、また他の誰よりも、これら3人のヨーロッパの思想家達が、シェイクスピアが対立に向ってとった態度の知的文脈(context)を立証してくれるからである。彼等の理論を知ることはいわれわれをシェイクスピアの比較的理解困難な構造に近付けてくれ、彼があのように永続する芸術作品を制作する上で基礎とした知的素材をいっそう充分に明らかにすることであろう。

(未完)

- 1) E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture* (London, Chatto & Windus, 1950).
- 2) Nicholas Cusanus (1401-64) のこと。スコラ哲学と近世哲学との中間に立つ独創的なドイツの哲学者。クセスに生れ、デヴェンテルの「共同生活の兄弟」の下に教育を受け、イタリアのパドヴァで法学、数学、神学等を修めた。聖職を奉じ、フランス、ドイツに歴任し、司教となる。その説はドイツ神秘説、プラトンおよび新プラトン学派、ピュタゴラスの数論の影響を受け、近世の機械的自然視の先駆をなすとともに感性、悟性の示す認識の上に直観（ドクタ・イグノランティア）の示す無限世界、神の世界を認め、汎神論と超神論、自然科学と神秘説との特異な調和の上に立つ見解である。この説は当時の自然哲学、神秘説並びに近世認識論に影響を与えた。
- 3) Giovanni Pico della Mirandola (1468-94). ルネサンス期イタリアの神秘思想家。ミランドラに生れた。ボロニアその他イタリア、フランスに学び、プラトンを研究し、アカデミーの徒と交りをフィレンツェに結ぶ。全世界は超感覚的な天使界と天体の世界と地上の世界とに分れ、神は全世界であり、一切の根源である。人間は小宇宙として全自然を自らに蔵する。人生の目的は神的根源への復帰、即ちわれわれ自らわれわれの造主なる神と一致することである。
- 4) Cornelius Agrippa (1486-1535). Nettesheim の Agrippa ともいう。ドイツの神秘主義者。ロイヒリンおよびルルス（ライムンドウス）の思想の影響を受け新プラトン主義とカバラの思想を抱き、秘術をもって自然を征服しようとした。若い時ヴェルツブルクの監督トリテムウス（Trithemius）の感化により秘密教に導かれ、*De occulta philosophia*（秘教哲学について）（1510, 1531-33）を書いた。この書の根本思想によれば、神はすべてをその精神のイデーにかたどって無から創造したというのである。彼は一切の学術に対して懐疑的な態度をとり、秘術に身を委ねた。
- 5) Baldassare Castiglione (1494-1541) ルネサンス期の哲学者。本文で詳しく説く。
- 6) Aureolus Theophrastus Bombastus Paracercus (1493-1541), ルネサンス期の医学者、自然科学者、神学者。本文で詳しく説く。
- 7) John Milton (1608-74). *Areopagitica*, in *Complete Poetry and Selected Prose of John Milton* (The Modern Library College Editions, New York, 1950), 677- ここで Milton が言っている林檎とは、神から創造された最初の人間であるアダムとイーヴが、楽園で全裸で幸福に暮らしていたとき、墮天使のサタン（悪魔）が蛇に化けてしのびより、神から喰べることを禁じられていた知恵の果実である林檎を喰べるようにとイーヴを通じて誘惑してアダムがそれを喰べたことを指す。そのため二人は裸体を恥じるようになり、神から楽園を追放され、これにより人間の罪と悪が生じた。いわゆる原罪（original sin）である。そしてアダムとイーヴは悪を知ることによって善を知ることになった。この主題はミルトンの代表作である *Paradise Lost*（失楽園、1667）で見事に描かれている。なお、最近平井正穂氏による立派な翻訳が筑摩書房から出た（1979年）、岩波文庫からも出ている（1981年）。
- 8) Neo-Platonism. ギリシャ最後の哲学的学派で、アンモニオス・サッカスの弟子プロティノス（Plôtinos, 204 または 5-270）によって開かれた。プラトンを誤ない権威としてその教に従おうとしたためこのように呼ばれる。じっさいはストア学派、新ピュタゴラス学派等の説をも採り入れている。しかし全体としてその説は

Spiritualism を徹底させ、従って宗教的傾向が著しい。プロティノスはギリシャの哲学的思索の総果を当時の神学的動機によって解釈し、またギリシャの神々の概念を哲学的に弁解したものと言えるが、彼以後も神学との抱擁はますます顕著になった。彼の弟子のボルフェリオスはアレクサンドリア派を開き、その弟子ヤンブリコスは一シリア派を開き、デクレッポスやローマ皇帝ユリアヌスはこの派の感化を受けた。また5世紀になって、プルタルコス（アテナイの）によってアテナイ派が起こされた。プロクロスはその派の最も卓越した人である。529年皇帝ユスティニアヌスがアテナイの学園を閉鎖した後、この学徒は多くベルシャ地方に去ったが、その派の神秘主義的思想はアラビア、ユダヤ及び西ヨーロッパの哲学の中に長く生き、アウグスティヌス、スコラ神学、殊にベルナルド（クレールヴォーの）、ドイツ神秘主義者、中世の神秘家、ルネサンス期の新プラトン学者等に著しく影響した。

- 9) Aristotelês (英語では Aristotle, 前384-322). トラキアのスタゲイラに生れ、プラトンの許に学ぶこと20年、後アレクサンドロスの師となる。前335年アテナイの郊外リュケイオンに学校を開いた。（いわゆるペリパトス学派。逍遙学派と訳される。アリストテレスが散歩しながら講義したところからこの名が附いた。）初めはその師の教えに従っていたが（その時代の作は殆んど失われた）次第に独立した思想を得、殊にプラトンの二元論的傾向を鋭く非難し、イデアを事物の本質もしくは個々の事物の質料、即ち可能的な力（*dunamis*）の実現すべき形相とし、すべて全自然界を質料（その純粋なものは第一質料）が目的としての形相を実現する発展の過程（*energeia* または *entelekheia* として見、——質料が個物のうちにあって実現しようとする力とみられる時第二質料と呼ばれる。——この立場から諸現象を説明した。そこで彼の哲学的思索は常に経験的現実在即して行われ、彼は種々の範囲において科学の祖となった。この特質により神の観念も彼には宗教的信仰の対象ではなく、神は総ての質料が全く実現してもはや質料としての影を残さぬ純粋ないわゆる第一形相（*prôtôn eidos*）、全自然界の最高目的、あらゆる運動の最後の原因で、自らは動かされることのない第一運動者、あらゆるものの愛と思想との対象となるが、自らは自己以外にその対象を持たぬ絶対者、即ち自己を内容とする「思想の思想」（*noêsis noêseôs*）である。自然界を支配するエンテレケイアの思想は生物界にも認められる。即ち生物の体軀の実現が靈魂、靈魂の最下段階は植物的靈魂（*to threptikon*）、次に動物における感覺的靈魂（*to aisthetikon*）、終に人間には理性（*to dianoêtikon* または *nous*）が現われる。従って理性の全き活動によりすべての心理的作用が統御されて、人間の行動が調和的中間の秩序を保ち得た時に倫理的な徳が到達される。しかし人間の幸福は個人の生活では完成されない。国家的団体において初めて完成する。それで、彼の哲学体系においては、倫理学は国家学の一部門に過ぎない。詩学において彼が芸術の本質を模倣（*mimêsis*）に認め、殊に悲劇を「同感と恐怖とによりその情緒からの浄め（*Katharsis*）と定義したのは有名である。しかし彼の学的業績の最も重要なのは、学的思考の原理を考究して初めて論理学を組織したことで、殊に三段論法を説いた分析論（*Analytica*）と帰納法（*epagôgê*）を論じた *Topica* とは重要である。これらのほかに範疇論（*Categoriae*）その他の論理学書があり、後に総括して *Organon*（思考の「器」の義）と呼ばれた。このほかに残存する主な著作は、*Metaphysica*, *Physica*, *De Politica*, *Poetica* 等である。（著作はラテン名）近時、彼の蒐集した国家資料の一部「アテナイ人の国家」が発見された。

- 10) Scholasticism. 本来の意では中世の *scholasticus*（ラテン語）の学であって、こ

の語は schola (=教会または修道院所属の学校) から出て、その学校所属の教師を意味する。後では大学で学問の研究に従事する者を言うようになった。殊に哲学及び神学を特殊の精神や方法に従って考究し、且つ教える学者を指す。しかし哲学・神学ばかりでなく、あらゆる学問の範囲にわたって研究を進めた。それは、もちろん教会の権威 (auctoritas) を認め、その教義の学問的根拠を確かめるのを目的としたが、同時に哲学的認識および思弁、即ち理性 (ratio) をも重んじ、そこからキリスト教弁証論が発達した。これは当時のアリストテレス研究に随伴している。他方には新プラトン主義的な神秘思想との関係も密接で、同時に神秘的傾向を持つスコラ学者も多い。だいたい4時期が区別される。1) 成立期 (9世紀から12世紀末まで) エリウゲア、アンセルム、アベラルドウス等が代表者。2) 盛期 (13世紀) アレクサンダー・ハレシウス、ボナヴェントーラ、アルベルトウス・マグヌス、トマス・アクィナス等が代表者。彼等は神学系統の組織者で、汎論学者と呼ばれる。3) 衰退期 (14世紀及び15世紀前半) ドンス・スコートウス、オッカム等が代表者。二重真理説が起り、神学と哲学、信仰と知識との調和が努力されないようになる。また実念論と名目論、主知説と主意説との論争がある。4) 近世への過渡期 (15世紀後半から17世紀まで) スワールス、モリナ等イエズス会の学者達。

- 11) Giordano Bruno (1548-1600) ルネサンス期イタリアの哲学者。本文で詳しく説く。
- 12) Platôn (前427-347) 英語では Plato. Platôn というのは原義では肩幅が広い、ということであり、それに因んだ呼び名であるらしい。本名は Aristocles. ギリシャの大哲学者で、アテナイの人、貴族の出、ソクラテスに学び、アカデメイア (アカデミー) に大学 (ヨーロッパ最古の大学) を開く。著者の年代順については従来学者間に意見の相違が甚しいが、今は文体統計法 (Stylometric method) により大体に説の一致を見た。第一期はソクラテスの立場にある。第二期は彼独自の学説建設の時代で芸術的にも優れた諸作 Sumpotion, Phaidon, Politics 等を書き、第三期は特殊問題に入り、殊に論理学、自然哲学に対する深い関心を示した。先づソクラテスの影響によって、人生の意義、価値、理想を哲学の根本問題とし、哲学即生であり、学問は文化創造の原動力であると見る。認識を方法的に探究し、認識の本質をなすところの概念により、あらゆる事象に論理的統整と基礎とを与えようと努めた。その方法はソクラテスの問答法を補い、弁証法を以て思想の深化を跡づけた。認識の本質である概念を「エイダス」または「イデア」と称し、それは経験的、知覚的現実界の相対性に変動されない普遍妥当性を有するもの、現実的事象の根拠、規範、価値、理想であるべきものである。しかし主知主義の立場に立つ彼は理論的規範と実践的規範との区別、また事実の認識の規範概念と抽象的普遍概念との区別を明に意識せず、そのために殆んどあらゆる普遍概念をイデアとして認め、その点で思想上の難点に陥入った。しかしその精神においてはイデアは普遍妥当的価値と解さるべきである (ロツェはこの故にイデアの「あり」は「妥当」Geltenであると解した)。「善」のイデアは総ての「あり」を超越して、しかもこれを基礎づける最高のイデアである。このような理論的原理であるとともに、文化創造の実践的原動力であるイデアは、また永遠、絶対的な実在として形而上学の対象となり、さらにそれを直観し、それと合一することに人生最高の幸福を認めて宗教的要求の対象ともなった。このイデアとの合一に向う要求、熱情をエロス (恋愛を意味する) と名づけ、その愛の発現こそ即ち哲学 (Philosophia, 愛知を意味する) である、とする。このような永遠のイデアと合一することのできる人間の精神 (プシケ) は、また等しく永遠的存在を保たなければならないとして、オルフィック

派の靈魂不滅説に哲学的根拠を与えようと努めた。イデアの認識については有名な想起説を説き、生れ出る前靈魂がその純粋な相において直観したものを、不完全な模倣に促されて（即ち事実の知覚を機会として）想起するとなした。彼はまた「正義」のイデアの実現として理想的国家を説いた。彼の思想は、理想主義並びにそれに基づいた文化哲学の源泉となり、アリストテレスに対立して哲学史を支配する二大潮流の一をなしている。カントはその精神的後継者と言える。著作として残るものは三十余篇ある。その主なものは対話篇と呼ばれるもの約25篇、と「ソクラテスの弁明」と、13通の「書簡」の第一巻を除く大部分である。対話篇の主なものは Phaidon, Symposium (饗宴), Protagoras, Republic (国家または共和国) 等がある。岩波書店から邦訳の「プラトン全集」が出ている。

- 13) Hērakleitos 英語では Heraklitus (前535-475頃) ギリシャ哲学者でエフェソスの人。確信に満ちた態度でヘシオドス、ピュタゴラス、クセノファネス等を痛罵し、博識は決して真知でない、とした。彼によれば外觀上の多様もその本質においては一であり、現象の雑多の中には相互に美しい調和がある。しかもそれは刻々に生成変化し、流転こそ万物の実相である。「万物は流転する」(Phanta rhei), 「再び同じ流れに入ることはできない。」この流転の原因を事物の対立に見た。反対の傾向こそ変化を起こすものである。反対があって物には調和がある。「戦いは万物の父、万物の王である。」「神は晝と夜、夏と冬を司り、」この矛盾の均整を「秘められた調和」という。そして、宇宙の根源は火である。すべては火の変成で、火が熱を失い水や地となる、これを下り道といい、逆を上り道という。そして、この両道は同量の力によって動いており、常住の相を示している。生成の過程に存するこの法則は理性の対象であり、ロゴスである。ロゴスは物質界ばかりでなく、人間の中にも生きている。ロゴスに従うことこそ人間の最高の生活である。彼は簡潔な譬喩に富んだ散文を書いた。そのうち約130篇が残存している。
- 14) Dialectic. 本来会話の技術であり、弁論の方法を意味したが、その意義内容は多く変遷した。ゼノン（エレアの）は理性を信頼し、思惟を中心として実在の間接的証明を試みた。即ち、主観的弁証法である。彼によれば実在は矛盾のない所に成立する。ヘラクライトスは思惟と実在との一致を信じ、実在の流に従う所に思惟の本性を見た。即ち客観的弁証法である。彼によれば戦は万物の父、即ち矛盾は実在の本質である。ソフィストは相対主義の立場に立ち、ヘラクライトスが客観に認めた矛盾を主観の立場の中に認め、思惟の普遍的妥当性を否認し、詭弁を以て敵説を論破した。（この術を詭弁術という。）ソクラテスはこれに対し真理の絶対性を主張し、その探求を問答法（帰納的な方法）に求めた。プラトンは、概念的認識は帰納法によって見出されるが、これだけでは確立しない。これを補うのに演繹法を要するとし、この二方法を弁証法と見た。アリストテレスによれば弁証法は学問的方法（帰納及び演繹）に対する単なる準備的方法であり、かつ論争の手段、思惟の訓練であるに過ぎない。形式論理は彼によって実在の論理から区別された。新プラトン学派のプロクロスに至って弁証法は主観的な手段ではなく、客観そのものの展開過程を意味するようになった。即ちプロティノスの流出は一（一般）から多（特殊）への分化および復帰の過程と解された。近世に至ってカントは実在と関係のない形式論理に対して新しく先験論理を立てた。その中心原理である先天的綜合判断の可能は、認識的表現において「反対の綜合」をある範囲において解決することができた。宗教的および芸術的直観でなくては捕え得なかった「反対の一致」が、ここに初めて思惟によって然し或る範囲において（即ち、数学自然科学の領域において）

解明された。そこには尚先驗論理の可能の及ばない範囲が残されていた。即ち従来
 の形而上学の対象は今や物自体として認識を超越する。しかも理性はこのような存
 在の仮定を要求して止まない。これを認識の領域に加える時、それは実質のない仮
 現となる（先驗的仮象）。彼の先驗的弁証論とはこの仮現を批判し、これを排除す
 るということである。即ち彼において弁証法は批判となり、先驗論理の附加物と墮
 した。さて先驗論理において解明され得ない實在の諸領域、即ち道德、宗教及び芸
 術、有機的自然等が、かの数学自然科学の基づく原理と同一の原理に基づくことは
 果して不可能であろうか。言い換えれば思惟の原理があらゆる實在の唯一原理であ
 ることは不可能であろうか。フィヒテの「事行」（Tathandlung、純粹活動、或は
 無限に続く自己反省）は認識論の意味においてこの問題解決の第一歩となった。物
 自体を排除した事行はあらゆる實在の原理即ち「反対の綜合」の原理である。しか
 しこの綜合は余りにも主観的抽象的に過ぎた。シェリングは客観性を強調して、事
 行を「反対の一致」即ち「主観と客観、観念と實在の同一」としたが、その内容は
 形而上学化され、思惟に理解されない。ヘーゲルに至ってようやく問題は解決せら
 れ、同時に弁証法の完成を見た。彼の弁証法の発展段階は、1) 啓蒙的カント的 2)
 神秘的汎神論的（生命の弁証法）、2) から3) に渡り、組織的反省的（「精神」即ち
 文化史的の弁証法と反省即ち意識における弁証法）。彼は悟性に不可測に見える生
 命及び歴史の原理も、要するに思惟その者の自覺にほかならぬことを説いた。彼の
 「精神現象学」によれば文化史的生命全体の原理は単に神秘的であるばかりでなく、
 むしろより多く歴史的である。歴史の諸段階の關係は、統一者が被統一者である意
 味において否定し、ある意味においてこれを保留する。このような歴史的の否定が
 その本性において論理的であることを自覺するところにこの学の立場が到達され
 る。したがって第三期には生命という語に精神という語を置き換えた。どのように
 して自然科学的客観性に対して精神の客観性を確立することができるか。それには
 歴史的の否定の意義を洞察しなければならない。それは要するに一種の「反対の綜
 合統一」である。ここにおいて問題は「反対の綜合」の意義をカントより更に深
 く、更に「論理的」に理解するにある。直接自同の状態においては、すべての概念
 はその成立過程を抽象して固定する（アン・ジヒ）。抽象固定の作用が完成されると
 反省の状態が生ずる（フュール・ジヒ）。即ちあらゆる概念はその内に「矛盾」を
 含んでいる。この「矛盾」のために各概念はその対立の立場を超越して自己と対立
 者とをより高い自覺の中に綜合（即ち、止揚する（アン・ウント・フュール・ジヒ）。
 あらゆる概念は以上三段の過程（正、反、合）を持つ。直観、反性（悟性）、自覺
 （理性）は要するに思惟の三段階の過程にほかならない。そして、このように分離
 綜合されるものは同一の概念であるから、この展開過程は一概念の自覺の深まり、
 「現実化」に行く過程にほかならない。このようにして正反合の方法は最も具体的
 な自覺の自覺、思惟の思惟、即ちその方法そのものの自覺（絶対理念）に達するま
 で無限に反復されて休止することを知らない。ここにおいて弁証法はもはや単なる
 認識方法であるに止まらず、同時にその眞の対象であり、全「實在」そのものの運
 動である。即ち、思惟の原理はあらゆる實在の唯一の原理となる。要するに弁証法
 は實在認識の一方法であり、それが概念的認識である以上、その方法は神秘的直観
 におけるように直接的全体的に眞理を捕えるのではなく、無限の過程のなかにおい
 て抽象的眞理を具体化して行く間接的方法である。したがって、その方法の原理は
 矛盾の排除（否定）および綜合（否定の否定）の原理でなければならない。

ヘーゲルの弁証法を転倒したと言われる唯物弁証法は、運動する物質を以てその

全理論の出発点とし、物質の一般的運動法則および運動形態は弁証法であるとするマルクス主義の方法論である。人間の意識から独立に存在する現実そのものが、弁証法的発展をなし、思惟の弁証法はこのものの反映にほかならない。唯物弁証法は、すべて現実を抱括する基本概念及び範疇を含む一般的弁証法であるが、現実の各個領域、即ち自然と社会は、一般的運動法則及び運動形態と並んで同時に、その領域に固有の、特殊な運動法則と運動形態と特殊範疇を持っている。一般的弁証法における抽象的範疇は、それが自然または社会に係るに従って、それに相応する種々な具体的形態をとる。このようにして、弁証法的唯物論としてのマルクス主義は三つの基礎的な構成要素から成る一箇のまとまった世界観、即ち一般的科学的方法論としての唯物弁証法、自然科学における方法論としての自然弁証法、及び社会科学における方法論としての歴史の弁証法である。唯物史観は一般的唯物弁証法の社会への適用であり、一般的運動法則の社会において具体化されたものである。マルクスは弁証法をヘーゲル哲学から取り入れると同時に観念の弁証法を転倒してこれを唯物論の基礎の上に立たしめた。唯物弁証法を自然の領域の中においたのは主としてエンゲルスの仕事である。自然弁証法はロシアのマルクス主義者によって特に重要視されている。自然は唯物弁証法の試金石でなければならない。唯物論によれば人間もまた自然の一部であり、最も発達した物質の一形態にほかならない。人間の存在し始める前に、したがって彼らの社会とその歴史との始まる以前に自然があった。したがって、自然の弁証法は唯物弁証法の礎石であると考えられなければならない。

- 15) Sókratēs (英語 Socrates) 前469 (或は 470)-399。ギリシャの哲学者。彼には著作がなく、その人格及び事業に関する主な資料は弟子プラトン、クセノフォン（両者は親しく師についた）及びアリストテレス等の著述である。アテナイに生れ、父は彫刻家、母は産婆であった。その時代の混乱した社会を慨嘆して、街頭、市場、集会等に出て、痛烈な論法で因習と阿世に対して戦い、時流に投じて修辭、能弁の術策に墮したソフィストに反対してその独自の問答法で相手の矛盾を暴露し、その無知を自覚させたが、それは各自の反省と覚醒を促す激励法 (protoreptikê) であった。終始三十年自ら国民の精神的指導者を以て任じ、市民の精神的向上、道徳的革新を實行しようとした。この熱烈な行動は時の青年の胸底を揺がし、彼の下に多く集って正義を主張し、時の権威のままにならなかったために、ついに七十余才で、青年を惑わし国家の神を否定するものとして告発され、従容として毒杯を傾け、真理のために斃れた。彼は飽くまで知識と実行の合致に努力した行為の人であった。彼を概念規定による学問の改新者と見るのはアリストテレスから始まる後世の誤解である。彼の最高価値とする真理 (phronêsis) は、単なる学問では得られず、常に積極的徳行の実現の中にのみ獲得される。その知徳合一の境にはじめて真の幸福が存すると説いた。これまで国民の精神的指導者であった詩人達にとって解決困難な神義論の問題は、この「徳即福」の確信によってようやく解決された。彼は良心の声としてダイモニオンの忠告をすでに聞いていたが、さらに神の摂理の信仰を得た。また彼の論法である無知の告白は相手を誘い出すための仮面 (eirôneia) であるとともに、単なる物知りを真の知識と信ずるものに対する皮肉であり、真知の理想への不断の要求であった。これがいわゆるソクラテスのアイロニー (Socratic irony) である。ここからして彼はデルフォイのアポロン神殿に掲げられた「汝自らを知れ」を自己の活動の標語とした。しかもこの彼の帰納法において、その真理の絶対性を基礎づけるものは彼の善の確信であった。善は美と厳密に一致した最

高のもので、これの獲得が徳であり、また知であった。かくして、善(agathon)とは何かという問題は、ソクラテス学徒の主要な課題とされるようになった。

- 16) Janet Adelman によればローマは measurement, エジプトは excess である。
- 17) Paradox. もとはギリシャ語で、普通に反対する説という意味であった。即ち衆人の予期に反して、一般に直理と認められるものに反する説である。また、稀には自家撞着の説を指す。奇論、背理、逆理とも訳される。西洋古代においてはゼノア(エレアの)の逆説(奇論)がある。ストア学派及びその時代の学者(たとえばキケロ)もまた逆説で一見奇矯な、常識に反するようで、実際は根拠のある説として大いにこれを用いた。近世ではルソーは、逆説を、その現れること百年早くに過ぎた真理といい、ショーペンハウエルは逆説の形でその説の真理であることを示す好弁証であると考へて大いにこれを用い、ニーチェもまた好んで逆説的文章を用いた。東洋では禅家や老荘者に殊に逆説的表現が多い。例えば老子の「大道廢れて仁義あり」がそうである。しかし逆説を好み過ぎると、誇張や衒奇に流れ、殊更に異を立てる弊に陥り易い。
- 18) Francesco Petrarca (1304-74) イタリアの詩人、哲学的論文の中でストア主義的倫理学のアタラクシア(心の平静)の理想への傾向を示している。
- 19) Jean Calvin (1509-63). フランスの宗教改革者。Pirardie 州 Noyon に生れ、法学及び古典を学び、エラスムス等の人文主義的宗教改革思想に触れ、ルッターの思想にも動かされて福音主義的回心を経験した(1533年秋)。それからパリを追われ、バーゼルで神学を研究し、*Christianae religionis institutio* を著した。1536年夏ジュネーヴでファーレルから勧められて改革事業を助けたが、38年、反対者のために追われてストラスブールに去り、41年再びジュネーヴに来て運動を継続し、ついに政治的権力によって、あらゆる教会的組織・慣習・儀式ばかりでなく、政治及び司法上の制度・法律をも改革した。その際彼が書いた規定、*Ordonnances ecclésiastiques* は後の改革教会の典型となった。その後も彼の施政及び神学説(殊に予定説)に対して反対者があったが、彼は常に厳格な処罰を加え、反対を排除した。学者としては宗教改革者中彼に及ぶ者はいない。前著は最も優れた神学体系で、教版を重ねた。彼によれば神は絶対万能の意志で、あらゆる地上の事物現象はその現れである。人間の救も全然神の自由意志によるもので、従って予め決定されている(予定説)。人は神の前に全く無力で、服従して神の栄光と名誉とを讃美しなければならない、という。彼の宗教には旧約的予言者の要素が著しい。ルッター、メランヒトン、ツィングリ等の影響もあるが、彼の固有の信仰はその神学に独特の特徴を与えた。人文主義的傾向もあり、聖体説においては象徴説をとった。彼の教はジュネーヴの神学校を通じて伝えられたが、殊にイギリス及びアメリカの長老派の中にカルビン主義神学が長く勢力を保った。
- 20) Sir Philip Sidney (1554-86) 英国の詩人・作家・政治家・軍人。主著 *Arcadia* (1590)。
- 21) Stoic school. ギリシャのゼノン(キプロスの)が創立し、クレアンテス、クリシッポスが継承発展組織し、更にローマに入り、帝政時代に全盛を極めた哲学派で、その主な者はセネカ、エピクテトス、マルクス・アウレリウス・アントニヌス等である。その説は先ずキニク学派の倫理説をヘラクレイトスのロゴス説に結合したもので、その主眼は倫理であり、その認識論は感覚説であり、その形而上学は有機的唯物論或は自然的汎神論である。世界精神、宇宙理性が万有に遍満し、秩序目的調和の原理として働き、その支配は必然的宿命的であるが、同時にそれは摂理であ

る。この實在観を基礎にして全自然の道徳を説く。人間の自然は宇宙理性の分身である人間の理性であり、徳とはこの自然に合すること、即ち理性に従うことである。合理性は全自然であると同時に全宇宙である。全自然の生活とはアパティア即ち、激情によって理性が妨げられ、靈魂が拘束される悪の状態から自由な、善であり、幸である。そのためには義務至上、克己禁欲を旨としなければならない。

- 22) Puthagoras. 前6世紀のギリシャのサモスの人。その学説は、彼を継いだピュタゴラス学徒（フィロラオス、リュシス、アルキュタス等）のそれと区別することは困難で、ただ彼以後の諸学派の影響を除いて初期の固有思想と見られるものを彼に帰し得るに過ぎない。彼の思想には哲学的宇宙論の方面と宗教的方面とが混在している。前者においては大体アナクシメネスの影響を受けて、空気を無限者と考え、これによって事物の発生する過程を限界あるもの（ペラス）が限界のないもの（アペイロン）に形式を与えること、即ち型（エイドス）を作ることと考えた。この考えを宇宙に推し広めて、数が宇宙の常住的原質であり、万物を秩序正しいコスモスたらしめるものとした。即ち偶数（限りなきもの）と奇数（限りあるもの）との関係によって万物は成立つ。但し、数とは抽象的概念ではなく、空間的性質を脱しない幾何学的図形のように考えられた。この数を原質とする思想から彼は音楽と学問特に数学を重んじた。宗教的方面ではオルフィック派の影響を持つ再生輪廻の説である。禁欲説、原始的タブーの痕跡を示す十余箇条の戒律、アポロン崇拜の主要観念である潔身等に特徴がある。彼の後その学派には宗教的神秘的傾向を脱して理論的方面に進もうとする傾向が強くなり、独特の宇宙論を発展させた。後プラトンのアカデミーの勃興とともに学問的活動はそれに譲ったが、宗教的団体としてはなお暫く勢力を保った。
- 23) Hermes Trismegitus. ゲノーシス派（ゲノーシスとはギリシャ語で「知識」の意で、その派とは、靈的直観的認識を唱える人びとを指す）がエジプトの神 Thothに与えた名。Hermes と同一視され、魔術・占星術・錬金術に関する書物の著者とされた。
- 24) Ataraxia. ギリシャ語で「静穏」とか「平静」の意である。
- 25) Erasmus (Rotterdamの) (1466 頃-1536) 人文主義者。初め修道院で学び、後諸国で古典学を研究し、1509年ケンブリッジ大学の哲学教授になった。15年大陸に去り、21年バーゼルの教授となった。彼はその人文主義的立場から宗教改革の精神に同情したが、改革者が教皇と教会とに反抗するのを快しとせず、24年「自由意志論」(Diatribes de libero arbitrio) を著してルッターの教を非難し、その後改革の反対者となった。29年バーゼルに改革が行なわれると彼もここを去ってフライブルクに赴き、36年ブラベントへの旅の途中バーゼルで死去した。人文学者として彼は当時第一流の地位を占め、学界に大きな勢力を有した。その著 *Encomium Moriae* (The Praise of Folly, 「愚神礼讃」) (1509) は有名である。
- 26) Sir Thomas More (1478-1535) イギリスの思想家、政治家。近世社会思想の先駆をなす空想的社会小説の中最も有名な *Utopia* (1516) を著した。ロンドン裁判官の子として生れ、オックスフォード大学に入り、人文的科学を学び、学才を認められ、外交界に身を投じ、後に下院議長大法官となったが、宗教上の問題に関して国王ヘンリー八世と合わず、投獄され、処刑された。当時のイギリスは織物業が盛となり、また穀物の値段が下落したことによって農民が一大危機に瀕し、乞食や失業者が途上に群をなした。彼はこの社会的窮状のうちにおいて理想的社会を描き、この理想的社会においては万民が幸福な経済生活をすると言いた。「ユートピア」は

プラトンの国家篇を模した共產主義的理想国の描写である。

- 27) Michel de Montaigne (1533-92), ルネサンス期のフランス懐疑学派を代表する思想家である。ペリゴールに生れ、ボルドーで法学その他を修め、1570年官を棄てて著作十年、諸地を旅して帰り、81年ボルドー市長となった。その著 *Essais* (1580) 「随想録」は文学的に叙述された処生哲学で、彼によって復興された古代の懐疑論を基調とする折衷主義の哲学と、幸福主義の倫理宗教観とがある。一切の知識は相対的である。この理論上の懐疑論は実践上では習慣の尊重、自然への服従となる。即ち倫理上では中庸な幸福主義、教育上では自然主義、宗教上では寛容主義となり、自然と福音書とを確実な指導原理とした。
- 28) Francis Bacon (1561-1626) イギリスの哲学者。デカルトと共に近世哲学の祖と呼ばれる。ロンドンに生れ、ケンブリッジ、パリに学ぶ。長く官界にあり、晩年退いて研究著述を事とした。知識は先入的偏見即ち偶像 (idola) を破壊した地盤に立って、観察経験に基づく帰納法を行うことによって得られると説き、経験学派の祖となった。彼の功績は自然研究によって得た知識内容の豊富ではなく、これを得る方法を立てたところにある。なお、いわゆる Baconian theory, 即ち、シェイクスピアの作品はベーコンの作だとする説のベーコンとは彼のことであり、18世紀の中頃に始まったが、その誤りであることは既に証明されている。

附 記

1. Huxley の訳は、橋口稔・前川祐一両氏のを拝借した。「A. ハックスレイ、文学と芸術、ハックスレイ・エッセイ集(1)」(社会思想研究会出版部、昭和36年)。
2. John Milton の *Areopagitica* という書名はラテン語で「大法官」の意であって、詳しくは、*Areopagitica, a Speech of Mr. John Milton for the liberty of Unlicensed Printing, to the Parliament of England* である。検閲からの自由を主張して、議会(長期議会)に抗義するために、1644年11月25日出版したパンフレットで、言論出版の自由における有名な古典である。当時イギリスでは、1643年6月の議会命令で、全出版物は議会の事前検閲と、出版文具組合 (Stationer's Company) の登録を必要としていた。ミルトンは妻メアリーとの離別問題から、43年8月「離婚論」(*The Doctrine and Discipline of Divorce*) を書いて出版したが、これが検閲、登録を経ないものであったために翌年8月議会の問題となった。「アレオパジティカ」はこれに対する抗義として、故意に無検閲無登録で出版された。ミルトンはこの中で「われに自由をあたえよ、良心にしたがって自由に知り、自由に語り、自由に推論する自由を、他のすべての自由より以上にあたえよ」とのべ、1643年の議会命令の廃止を要求し、出版許可および検閲制度の不合理性を強く批判した。この主張はすぐに実現されなかったが、「アレオパジティカ」は言論自由の最初ののろしとして、ミルトンの名とともに歴史の中に光り輝いている。
3. ルネサンスの対立の思想及び、カスティリオーネ、パラケルスス、ブルーノの三人については、Robert Grudin の, *Mighty Opposites, —Shakespeare and Renaissance Contrariety* (University of California Press, 1979) が大いに参考になった。